

旧遠山家住宅

遠山家住宅は、合掌造りの伝統的な農家家屋が最もよく保存されているものの一つである。この住宅形式は江戸時代後半に庄川流域で発展したものである。「合掌」とは、急勾配の茅葺き屋根の形が、両手を合わせて祈る姿に似ていることから名付けられた。他にも、切妻造りの両側に窓を持つ広々とした多層式の屋根裏部屋、1 階の真ん中に置かれた囲炉裏、および焰硝（火薬に不可欠な原料の硝酸カリウム）を作るための床下の穴など、遠山家住宅に見られる合掌造りの特徴は多岐にわたる。

この家は、1850 年頃、当時の御母衣集落で最大規模を誇り、世襲で名主を務めていた遠山家のために建てられた。この家には同時に 48 人もの大家族が同居していた。農地が少なく、養蚕などの家業に全員の労働力が必要だった御母衣では、このような形態が一般的だった。遠山家住宅が最初に注目されたのも 1800 年代後半から行われた人類学的な大家族制度の研究だった。

また、日本に 3 年間滞在し、日本の建築を詳細に研究したドイツ人建築家ブルーノ・タウト（1880-1938）の影響も大きい。タウトは 1935 年に遠山家住宅を訪れ、合掌造りの家をスイスアルプスの農家の家屋と比較し、その「合理性」とシンプルさを絶賛している。タウトの言葉が後に地元の人々を刺激し、それらの建築物を保存する・その文化的価値を認めてもらおうという取り組みにつながったとも言われている。